

科学社会学会第9回年次大会 プログラム

20200923 ウェブサイト版

2020年9月27日（日）

Zoomによるオンライン開催

第9回年次大会実行委員会

寿楽浩太（東京電機大学・委員長）・定松淳（東京大学）・標葉隆馬（大阪大学）・河村賢
（大阪大学）・開田奈穂美（福岡大学）

【オンライン開催について】

新型コロナウイルス感染症に係る現状に鑑み、感染拡大防止をはかり、皆さまのご健康と社会活動の継続を第一としつつ、本会の本旨である闊達な学術活動を最大限に維持する観点から、本大会はテレビ会議システムを用いたオンライン開催とします。

発表者は、同システムを用いたリアルタイム発表、もしくは事前収録動画による口頭発表を行うことができます。大会参加者は同システムを介して発表を聴講し、あるいは発表者に質問を行うことが可能となります。

また、当学会の今年度の総会につきましても、テレビ会議システムを用いてオンライン開催いたします。

学術分野における普及状況に鑑み、「Zoom」を本大会のテレビ会議システムとして使用します。

【参加登録ならびに参加費について】

- 本会会員（正会員・購読会員）は特段の手続きなく本大会に聴講者として参加いただけます。今回はオンライン開催に伴い、開催に係る費用も節減できておりますので、皆さまから頂戴している会費から所用の費用を支出します。つきましては、会員（発表者の正会員を含む）の参加費は無料といたします。聴講希望の会員の方は、事前の参加申し込みは不要です。
- ~~本会会員ではない方で、本大会への参加を希望される方は、恐れ入りますが郵便振替による参加費の事前納入をお願いいたします。参加費 2,000 円を 9 月 22 日（月・祝）までに下記の本会口座にお振り込みください。また事務局（sssj.office@gmail.com）までお名前とメールアドレスをお知らせください。（受け付け終了いたしました）~~

郵便振替番号 00200-6-5694（加入者名：科学社会学会 SSSJ）

※他の銀行からの振り込みの際は、以下の口座をお願いします。

ゆうちょ銀行 ○二九店（ゼロニキユウ店 店番 029） 当座預金 0005694

加入者名：科学社会学会 SSSJ

- なお、本会は正会員年会費 6,000 円、正会員（大学院生等）年会費 3,000 円にてご入会いただけます。正会員は年次大会での研究発表を行えるほか、本会学術機関誌『年報 科学・技術・社会』（頒布価格 2,950 円）1 冊を年 1 回受け取ることができます。本会 Web サイト（<http://www.sssjp.org/>）にて手続きをご確認の上、ぜひこの機会に入会をご検討ください。9 月 22 日（祝）までに入会手続きを完了された方も本大会に会員として参加いただけます。

【大会の進行に関する一般的なお願い】

- 発表時間は最大 20 分間です。その後、質疑応答の時間を最大 10 分間とします。つまり、各発表には合計して 30 分間の時間が割り当てられます。遵守をお願いします。
- なお、第 2 セッションについては、大会実行委員会の判断により、ミニシンポジウム形式にて実施することを各発表者に依頼しておりますので、発表者 1 人あたりの持ち時間（計 30 分）は変わりませんが、異なる進行で行います。具体的には、4 名の発表者から 15 分程度の話題提供を受けた後、発表者間のパネル討論、そして聴講者も交えた全体討論の順でセッションを進行する予定です。当日の座長の進行にご協力ください。

【Zoom によるオンライン開催に関するご案内と注意事項】

- 接続先 URL（あるいはミーティング ID、パスワード）は会員ならびに事前登録済みの非会員参加者へのメール回覧にて別途、大会の数日前に通知いたします。
- Zoom のアカウント作成や各 OS 向けアプリケーションの導入等の事前準備は、恐れ入りますが皆さま各自にてご対応くださいますよう、お願いいたします（インターネット上では関連する平易な解説情報が容易に見つかりますので、ご参考にされるのも一案かと存じます）。
- 各セッションや総会の Zoom ミーティングは、事務局が「ホスト」となって開催します。
- 皆さまが Zoom ミーティングに接続されましたら、いったん、「待機室」にお入りいただき、会員名簿あるいは非会員事前登録参加者名簿と照合の上で会場にお通しいたします。
- ついては、接続の際の皆さまの Zoom 表示名について、できるだけ本会が把握しているお名前と一致したもの（あるいは容易に推測できるもの。例：ローマ字表記）に設定くださるよう、ご協力をお願いいたします。ニックネーム等で判別が難しい場合は、個別チャット機能にてお名前の確認をする場合もありますので、その際はチャット機能にてご回答をお願いいたします。
- この手順が必要となりますので、会場となるミーティングルームへの入室はお早めにお済ませくださいますよう、ご協力をお願いいたします。
- 座長ならびに発表者の方々には「共同ホスト」権限を付与します。画面共有が許可されますので、発表者には各自のご発表資料を共有した上でのご発表、もしくは事前収録動画の再生をお願いいたします。
- 聴講者各位におかれては、マイクは常に「ミュート」するようお願いいたします。なお、発表中の静謐を保つ、あるいは討議の円滑な進行を図るべく、複数の方のマイクが同時にオンになっているとしばしば発生する場合がある「ハウリング」や「雑音」

を防止するために、座長もしくは事務局が必要に応じて皆さまのマイクを「ミュート」させていただく場合もありますので、ご了承ください。

- ご質問・ご意見等発言をご希望の際は、「ミュート」を解除して発言がある旨を発話いただいてもかまいませんが、その後、必ず座長（ないし発表者）の了承を得てからご発言ください。
- プライバシー保護や著作権保護の観点から、参加者の皆さまによる Zoom の機能を用いたセッションのレコーディング（録画）は許可しない設定といたします。また、その他の手段による動画の録画・音声の録音・静止画の撮影（「スクリーンショット」含む）も固くお断りいたします。もちろん、何らかの手段で取得した大会開催中の動画・録音・画像を SNS 上その他の公開・公共の場において第三者に閲覧可能にすることも厳禁といたします。発表者からも、この点を徹底するよう要望が出ております。ご参加の皆さまにおかれては、何卒ご協力をお願いいたします。
- なお、大会の学術的な記録としては、事務局にてレコーディング（録画）を行い、情報管理に十分留意した上で保管する予定です。録画には発表者以外の参加者の画像やお名前も映り込む場合があります。これらについてご懸念がある方は、ビデオやプロフィール画像などのご本人の映像はオフのまま参加される、Zoom での表示名を個人が特定されにくいものに変更する（上記の通り、入室時には学会にご登録の氏名への設定をお願いいたしますが、入室後の再変更は可能です）等の工夫をお願いします。
- 今後、何らかの正当な目的で会員各位や外部から閲覧の希望があった場合には、何よりもまず発表者の意向を確認の上で、事案の性質に応じて学会事務局、大会実行委員会、理事会において慎重に検討の上で対応いたします。
- 発表資料については、各発表者の意向を尊重しつつ、配布を希望する方の資料を電子的な方法で閲覧あるいは取得していただけるよう、クラウドストレージサービス「Box」を用いた電子ファイルの共有を行います。当該サービスは、ファイルを閲覧飲みの指定にする（ダウンロード不可）とすることも可能であるなど、各発表者の意向に応じた資料の共有に好適と判断しております。発表者各位には、ファイルアップロード方法等の案内を大会実行委と事務局が行います。会員並びに登録参加者の閲覧方法の案内は、電子メールにて大会当日以降にお知らせする予定です。
- その他、大会・総会オンライン開催は本学会としても初めてのことであることから、至らぬ点多々生じ得ますし、不測の事態も大いに予測されますが、事務局・大会実行委員会・理事会としても最善を尽くしますので、何卒、臨機応変にご協力のほど、よろしく願い申し上げます。

【プログラム】

11:30～12:15 総会

13:00～14:30 セッション1（個人研究報告）

座長：三上剛史（追手門学院大学）

1. 情報倫理学の前提を問い直すための視点としてのルーマン社会学

萩原優騎（東京海洋大学）

2. 情報技術は人間の道徳性向を補完しうるか

堀内進之介（東京都立大学）

3. ゲノム編集食品をめぐる関心と判断背景の探索的分析

標葉隆馬（大阪大学）、小泉望（大阪府立大学）

15:00～17:00 セッション2（新型コロナウイルス感染症感染拡大をめぐって）

座長：山中浩司（大阪大学）

1. 身体性と新型コロナウイルス感染症、Net 通信と医療

増井 徹（慶應義塾大学）

2. 時間を軸として考える「当事者」の存在

見上公一（慶應義塾大学）

3. 自粛と強制のあいだ——水俣病初期対応にみる日本行政における補償の制約要因

定松淳（東京大学）

4. COVID-19 の感染リスクと道徳化

小松丈晃（東北大学）

情報倫理学の前提を問い直すための視点としてのルーマン社会学

萩原優騎 (東京海洋大学)

情報倫理学における論点の一つに、「情報通信技術のグローバル化」がある。インターネットをはじめとする情報通信技術が発達するとともに、それらが世界各地に普及してきた。こうした状況では、情報の取り扱いをめぐる倫理的な諸課題についても、地域を越えて共有され得る視点が必要であるとされる。そのことから、特に欧米の主要な情報倫理学者は、文化相対主義への厳しい批判を展開してきた。そこでは、文化や価値の多様性に対する一定の理解と尊重を前提としつつ、普遍的な規範をどのように構築すればよいのかということについて、理論的な考察がなされている。

しかし、文化相対主義への批判として提起される普遍主義的な観点については、その有効性をめぐって疑問も提起されている。一方、文化相対主義と普遍主義の対立という図式そのものも、再考の余地があるのではないかと考える。こうした問題意識に基づき、本発表では、その手がかりとなり得る視点をニクラス・ルーマンの社会学に求める可能性について論じる。ルーマンは、観察行為における「ファースト・オーダー」と「セカンド・オーダー」の区別の重要性を指摘している。この指摘を参照することによって、情報倫理学の視点の前提を問い直すことが可能になるはずである。

1-②

情報技術は人間の道徳性向を補完しうるか

堀内進之介（東京都立大学）

人間の道徳性の向上は、人類史上の不変のテーマである。今日、協調行動を必要とする数多くの社会問題に直面し、このテーマへの関心はより一層高まっている。そうした中、人間の道徳性向を増進するための技術の利用が検討されてきた。神経科学や遺伝子工学、薬理学などの分野では、いわゆるバイオテクノロジーを用いた増進が検討され、そうした技術の一部はすでに利用可能になっている。しかし、それらの多くは物議を醸している。

他方、上記のような身体への侵襲的な方法とは別に、AIなどの情報技術を用いて、道徳的意志決定を補完する方法が検討されており、この方法の推進者たちは、こうした方法はバイオテクノロジーによる介入よりもリスクが少ない主張している。このような方法は、医療分野ではすでに「臨床意思決定支援システム」として導入が進んでおり、スマートフォンをはじめとしたデバイスにも、同様な意思決定支援サービスが実装され始めている。

しかし、情報技術を用いた方法は、価値多元的な社会の中でどのように道徳を定義しうるのか、という点に疑義が提出されているほか、特に認知的側面の強化に焦点化したものであるため、システムに道徳的決定を委譲してしまい、むしろ道徳的主体としての自律性を損なうことになるのではないかと、懸念も示されている。

そこで、本報告では、情報技術を用いて人間の道徳性向を補完・強化しようとする試みには具体的に、①どのようなものがあるのか、②どのように議論されているのか、③どこに課題があるのか、について議論を整序して示すとともに、このような方法は、バイオテクノロジーによる介入よりも好ましいと言えるのかについても、報告者の見通しを示したい。

参考文献

- Lara, F., & Deckers, J. (2019). Artificial intelligence as a socratic assistant for moral enhancement. *Neuroethics*, 13(3), 275-287.
- Savulescu, J., & Maslen, H. (2015). Moral enhancement and artificial intelligence: Moral AI? *Topics in Intelligent Engineering and Informatics*, 79-95.
- Heersmink, R. (2016). The internet, cognitive enhancement, and the values of cognition. *Minds and Machines*, 26(4), 389-407.

1-③

ゲノム編集食品をめぐる関心と判断背景の探索的分析

標葉隆馬（大阪大学）

小泉望（大阪府立大学）

1990年代以降の遺伝子組換え食品（GM食品）の事例にみるように、新規な技術の食品への活用は、その社会的受容をめぐり論争的なテーマとなる可能性がある。

そのようなこれまでの歴史的経緯を踏まえ、ゲノム編集技術などの新規な科学技術の活用においては、その社会実装に際して、人々がこの技術ならびに技術活用をどのように捉えているのか（あるいは捉えうるのか）について分析を行い、その問題関心を可視化していくことが肝要となる。

このような取り組み例として、例えば幹細胞・再生医療研究の事例では、一般回答モニターと再生医療学会員との間における「知りたい事柄」と「伝えたい事柄」の差異の存在が提示されている。例えば、研究者コミュニティ側は再生医療の科学的妥当性やメカニズム、また再生医療の社会的必要性といった事柄を重視して伝えたいと考える傾向にあることが見出されている。一方で、一般の人々は、科学的な内実以上に、また万が一の場合・問題発生時の対応、実際の費用、責任体制や規制のあり方などへの関心がより強く、再生医療が実現した場合にどのような社会になるのか、すなわちそのガバナンスにより関心が強いことが指摘されている（Shineha et al. 2018）。

このような視点からの分析は、今後のゲノム編集食品の社会受容を考える上でも有用であると考えられる。またゲノム編集食品ならびにGM食品の社会受容やその背景などについては、これまでも国内外での研究が重ねられてきたテーマである（Fishcoff & Drummond 2017; Fernbach et al. 2019; 立川ほか 2017; 加藤ほか 2017; 北海道大学 2019; 三上・立川 2019）。それらの先行研究の含意を踏まえながら、先の再生医療で見たような専門家コミュニティと一般の人々の関心の差異を可視化をする視点を組み合わせた分析を行うことが一つの方途として考えられる。

このような背景から、本調査では、一般の人々のゲノム編集食品への態度、また関心事を明らかにすると共に、専門家の意識との差異について検討することを中心的な目的とした質問紙調査を実施した。

本発表ではその結果概要を報告すると共に、その科学社会的含意について検討を行う。

身体性と新型コロナウイルス感染症、Net 通信と医療

増井 徹 (慶應義塾大学)

コロナウイルスが流行してから Web 会議が多くなった。移動の時間がなく、楽である。ところが以下の経験を通じ違和感を覚え、考えが変わった。

一つ目は、700 人を超えた Zoom セミナーで、聴衆すべて Mute でビデオオフである。聞いているか聞いていないかわからない、反応もわからない聴衆を前に話をすること。二つ目は、研究費の審査委員会・評価委員会である。被審査側は、顔を見せ発表する。審査側は名前も顔も見せず、声だけで質問をし、回答を受ける。なんとも気味の悪い光景である。三つ目は、検討委員会である。わたくしの発言のあと司会者も含めてみんな押し黙ってしまうことがある。この反応が何を意味するのか分からないのは不気味である。

心理学の斎藤環先生が、つばの飛ぶ距離での人間のコミュニケーションを「体液の混じる距離」と表現していた。人間のコミュニケーションの総体がもつ豊かさを Web システムは再現できない。その点を意識する必要がある。初めてニコ動を見たときに、コメントの入り方にびっくりしたが、コメントを入れるのも、参加感と観衆の反応の可視化を意図するのだろう。先日行われた米民主党の党大会も、興奮や一体感が共有されないことで、支持率の変動が予想通りでないという。

このような状況は既視性がある。医療という活動は、人の身体に触れることを基本としていた。現在、検査、可視化の技術が進み、医師は検査結果を見ながら、真っ青な顔をした患者を前に、「問題ありません」と宣言する。姿勢、顔色、態度、聴診、触診は、医療の基本から遠くなりつつある。

コロナウイルス感染症への警戒が「三密の回避」という行動を推奨している。そして、その状況は医療の世界では技術の進歩の中で進んできた、医師は患者を消費者として取り扱い、多忙な医療関係者は、患者に触れない。パソコンの画面を見ながら、話し、聞き取ったことを打ち込み、そして、遠くから話す。

コロナ下でのコミュニケーションも含めて、身体性の障害は、科学・技術により作られている部分がある。コロナ禍の中で、多様に我々を包む身体性喪失の総体を、見直すことも意味があると考ええる。

2-②

時間を軸として考える「当事者」の存在

見上公一（慶應義塾大学）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大は現在も社会に大きな影響を与えている。日本でその対策が本格化し、正式に科学の専門知が動員されることとなったのは専門家会議が設立された2月中旬と考えられることから、対策のあり方が政治と科学の関係の間に明確に位置付けられるようになって半年程が経過したことになる。COVID-19対策についてはこれまでも様々な角度から分析がされているが、本発表では時間を一つの軸として科学に対する期待と不信について考察を行う。

これまでの対策の主軸は接触の回避であった。このことは繰り返し使われた「三密」という言葉からも明らかであるが、具体的な対策としては3月初旬の全国的な学校に対する臨時休業要請に始まり、緊急事態宣言の発令と各種の自粛要請によってCOVID-19の拡大を抑えることが目指された。一定程度の成果が挙げられたことに加えて、経済的な影響が大きかったことから、5月後半には緊急事態宣言は解除されたが、その後も様々な活動に対して自粛が求められており、日常を取り戻すことができないことに対する不満の声が高まっている。

このような対策と時間の関係は、1990年代初頭にブライアン・ウィンが議論を行ったカンブリアの牧羊業者の事例に通じるものがある。科学者と問題の当事者となった牧羊業者の間にアイデンティティの衝突が生じ、科学に対する不信が高まったのは問題の発生後一定期間が経過した時期であった。今回のCOVID-19対策についても誰がローカル知を持つ「当事者」なのかについて考えることによって、同様のアイデンティティの衝突が生じる可能性を検討することができる。そして、そのような検討からは、早い段階から期待されてきた治療薬やワクチンの開発が今後科学に対する不信を高めるきっかけになる可能性が見えてくる。

本発表では、COVID-19対策の分析を通じて、科学と社会の関係について考える上で「時間」が持つ意味を考える必要性を提起したい。

2-③

自粛と強制のあいだ——水俣病初期対応にみる日本行政における補償の制約要因

定松淳（東京大学）

2020年の新型コロナウイルス対応においては、当初、緊急事態宣言の発出前後において、外出等の自粛要請なのか強制なのか、ということが問題になった。緊急宣言終了後、第二波の到来に直面するなかでは、自粛要請すらも控えられるようになった。そしてGO TOキャンペーンによって、感染拡大の予防に配慮しながら、旅行に出かけることが推奨される矛盾した状況となっている。

このような混乱した状況は、熊本水俣病の初期対応過程を想起させる。1957年に熊本県行政によって漁民に対し、「魚はとってもいいが、食べないようにという奇妙な指導」（原田1972:28）がなされているからだ。本発表では、既存研究に抛りながらこの熊本水俣病の初期対応を振りかえることで、今日の新型コロナウイルス対応も同様に規定しているであろう、日本行政における制約要因について掘り下げて考察することを試みる。

船橋（2000）によれば、1957年7月、熊本県行政は食品衛生法に基づいて漁獲禁止の知事告示を出す方針を定めていたが、これに対し9月、厚生省から食品衛生法の適用はできないとの連絡があったという。つまり、厚生省の意向によって禁止（強制）が覆され、上述のような「奇妙な（行政）指導」が出現したのである。この厚生省の意向は「つきつめて行くと補償の問題」であったとされている。

これは本来必要な経費を拠出できないということであり、60年の時を経て日本政府には同様の課題が存在していることがわかる。GO TOキャンペーンが実施されていることから明らかなように、省庁を越えた予算の組替えができないという、日本政府の予算構造の硬直性に光を当てる必要がある。それは行政に対する立法府・内閣のイニシアティブの弱さを意味している。今日の“政治主導”が省庁多元主義の延長線上に立つものでしかなく、本質的な政治主導たりえていないことを認識することができる。

COVID-19 の感染リスクと道德化

小松丈晃（東北大学）

COVID-19 にかかるリスクはシステミックリスクであり、また、被害の（範囲の）曖昧さ、因果関係の特定の困難さ、リスク曝露の時間とそうでない時間との線引きの難しさ等の「新しいリスク」（「じわり型」（松本 2009））としての特徴を備え、社会的分断の可能性も指摘できる。ワクチンがない段階では罹患者との接触を減らすことで基本的に抑制可能とされるが、科学的にも不確実で無知の部分が残る。こうした感染制御には種々のオプションがありうるが、日本ではその十分な検討や説明が不在のまま、積極的疫学調査によるクラスター対策が重視されてきたが、本来は、リスク評価から（それと区別された）リスク管理に至る諸段階で、受容可能性やリスクトレードオフ、（金銭的・非金銭的な）規制遵守コスト等に関する検討と説明が必要である。以前より指摘されてきたように、リスク規制が意図せずしてもたらす感染者表象に媒介されて、感染者の排除や道徳的非難や差別がもたらされうることもそうした検討材料の一つである。感染症に限らないが、そのリスクは道徳的非難と直結し無知（未知）であることがこれを助長する。COVID-19 対策に際してもこの点の考察は重要である。（潜在的）感染者は、リスク曝露可能性に関する自己点検をせず感染リスクの回避に関与しないという選択を（結果的に）行った者として道徳的に善／悪の判断がなされ、自己への配慮や自己管理能力の欠落した者として、（しばしば特定層の人々が選別されて）他者への潜在的な「リスク源」として評価・解釈されうる（「道徳のリスク」（Luhmann 1993=2015））。ここでは道徳は、連帯ではなく分断をもたらすものとして作用する。本報告では道徳に関する社会学的論考をも参照しつつ、COVID-19 の特性が解明されつつある今日も続く事態を見遣りながら、日常を道德化するリスク論議の役割について改めて考えてみたい。